

令和六年度 第六回串本町短歌大会入賞作品

特選

○ 様子見に還って来たか弟よ青い蜻蛉が庭低く飛ぶ

松下 昭子

○ いつか来る津波の恐れを忘れさせ波はゆったり渚を洗う

中西 みよ子

○ 娘に送る野菜に添えし地方紙はカイロスの夢大きく載せて

石垣 実男

秀作

○ コスモスを乱さぬ程の雨降りて秋はほんわか窓に来ており

西村 良子

○ 岩肌を緑に包むアオサのり磯で始まる故郷の春

石垣 多鶴子

○ 娘とふたり夕食介助の病室へ夫に短き家族のひとつき

米津 りつ枝

○ 高原に尾花おしなぶ風の中自在に心あそばせている

仲川 容子

○ 亡舅姑のソールフードは秋刀魚寿司今日の土産は一尾で足りる

登地 道子

○ 父母逝きし齡を越へて姉妹旅まだいくたびか続けむと願ふ

堀口和子

○ 一茶の句子供でなくとも取りたいと思う十五夜まんまる丸い

田城澄子

○ 「けふやな」と無口な夫のつぶやきぬ忘れてをりし二人の記念日

上田明子

○ 記録だけ多く残して夏が行き足投げ出せば暑き外縁

岩本政明

○ 知らぬまに入りくる蝶が幼子の昼寝の肩に翅をたためり

白藤巳玲

○ 乳呑み児は母の鼓動につつまれてオーケストラの「運命」をきく

北野惣一

○ 引き揚げの顛末記す古き帖「逃亡記」とあり考(ちち)の筆あと

村詰真紀子

○ トルコ艦の将士のねむる慰霊碑を没り日がいやす紀伊の大島

池中健一

○ 「ばあちゃんもそのうち月に帰るのか」そうよと言えは行くなと泣いた

樋口典子

○ 友よりの小菊の挿芽夏を越しけさは蒼に色の見えそむ

中根寿美子